ある脇役の英雄譚　改訂版

小元 数乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ある脇役の英雄譚　改訂版

【Ｎコード】
Ｎ７１３４Ｗ

【作者名】
小元　数乃

【あらすじ】
魔王の侵略。王侯貴族たちの腐敗。騎士団の弱体化。
様々な問題を抱えるスカイズ王国首都アタナシアに彼の姿はあった。
この世界ではわりとどこにでもある金髪碧眼。職業門番。趣味は釣り。歩く姿は一般人。

自分から『脇役だから～』といってしまう彼の名前はヴァイル・クスク。能力があるがゆえに貴族に色々と妨害を受け、いろいろなことを諦めてしまったダメ人間である。

そんなだらけきった雰囲気で、こっそりと王都を守りながら平和な暮らしを享受していた彼に、王宮からの突然の命令がやってきた。

『勇者召喚するから、その間の王宮警備をしろ！！』

そして、異世界から召喚された勇者とその友人によって、彼の生活は激変する！！

プロローグ（前書き）

二次創作が忙しいから……これ以上話膨らませんのは無理だろ～。

もろもろの理由で更新をやめるどころか、存在そのものを消してしまっていた問題作です。

色々と改造して再び投稿することにしました。

二次創作が全部終わるまでこちらに本腰を入れて更新することはできませんが、なにとぞ温かい目で見守ってください。

プロローグ

主人公……ヴァイル・クスクは『脇役』である。

金髪碧眼という、この世界ではわりとどこにでもある容姿。職業は門番。趣味は釣り。歩く姿は気のいい兄ちゃん。もはや『脇役どころかモブじゃね？』といわんばかりの容姿の彼であったが、そんな彼でもまわりが無能ならばそれなりの仕事をこなして『主人公』の真似事をしなければならないのだ。

たとえば……権力争いに明け暮れるあまり中央都市を守る騎士団が弱体化している王都。彼が門番をする、自称魔法大国・スカイズ王国・王都（アタナシア）がそれである。

騎士団はすべて貴族の身内で固められ、弱体化の一途をたどりもはやその武力を完全に消失していた。唯一の救いなのが国境を守る《四方騎士団》がいち早く権力の影響から抜け出し独自の武力とヒエラルキーを築き上げることに成功したことだろう。これによって今のところこの王国は何とか国境線の防衛に成功。かりそめの平和を国民たちは享受することができていた。

「とはいえ……いつまでもこんな調子でいて無事ですむはずもなく……」

ヴァイルはため息をつきながらそうつぶやく。敵……魔王軍は着々と進行を開始してきている。だからこそ彼はこんな夜遅くに仕事に駆り出されてしまったのだ。

現在彼がいるのは王都の南にある森の中。彼は、満月の明かりが

無数に差し込む薄暗い森の中を凄まじいスピードで駆け抜け、森の最深部へと向かっていた。なぜ彼がこんなところにいるのかというと、昨日城壁警備隊がキャッチした情報にこの森の多くの魔獣が潜伏しているという情報が入ってきていたからだ。

「これ全部駆除しても王宮に報告して褒美をもらうこともできないんだろう？　まぁ、報告したところで騎士団が全部手柄を持っていくんだろうけど……」

世知辛い世の中だ。まったくもってウザったい。

不快な感情を隠そうともせずに、内心でそう吐き捨てながら、ヴァイルは最深部に到着。周りを見渡し、そして……

「ようやく来たか……。眠たいんだからもう少し早くに来いよ」

（わざわざ誰でも気づけるようにあんな大きな足音させながら走り回ったんだから）

ヴァイルの内心で発言された不吉な言葉。残念なことに、その言葉を襲撃者たちは聞くことができなかった。

「ＧＡＲＵＲＵＲＵＲＵ！！」

明らかに人間ではなさそうなシルエット。森に中から出てきたそれらは赤く光る眼をランランを輝かせて、ヴァイルの周囲を固めていく。どうやら数の利を使って獲物を狩る魔獣のようだ。その数は、十……二十と時間が経つごとに増えていき止まる所を知らない。

しかし、その膨大な数のシルエットたちの出現にも、ヴァイルは

特に動じた様子を見せることなく、マイペースに背中にさしていた槍を手に取り、舞いを踊るかのように数個の型を披露する。そして、コンディションがいつもと変わらないことを確認した後、ヴァイルは眉をしかめながら森の中からこちらをうかがってくる者たちに話しかけた。

「明日も仕事があるんだ。五分で終わらせる」

それが開戦の合図。シルエットたちは森から一挙に飛び出し、ヴァイルに凄まじい速度で攻撃を仕掛けた！！　姿は二足歩行をするオオカミ。その大軍が、まるで直接的攻撃力を持った風のようにヴァイルへと襲い掛かる！！

飛び散る火花。鳴り響く金属音。

数秒という短い間に、何度も続いたそれがやんだ後には……。

「鋼の毛皮に白銀の爪と牙。魔王軍先兵……アイアンウルフか。本来なら斥候に使われる猟犬だろうに……。うちの王都に直接攻撃を仕掛ける気ならちょっと弱すぎるな？」

なめられてんのか？　誰に聞かせるでもなくそうつぶやくヴァイルの体は完全に無傷。そして、アイアンウルフたちは……

ＧＹＡＡＡＡ……。

哀愁漂う声で絶叫を上げ、その数秒後、喉から血を噴出させて絶命した。おそらくヴァイルを攻撃するのに使ったのだと思われる彼らの爪や牙は無残に折れており、そこかしこに欠片を散乱させている。

「悪いな。俺は基本的に攻撃が効かないんだ」

ヴァイルはそういうとおもむろに地面に拳を突き立てる！

ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＮ！！

到底人間のコブシが地面を殴りつけただけでは起らないであろう轟音が辺り一帯に響き渡り、まるで爆風のような衝撃波とともに土煙をまきちらす！！

森の中に潜んでいたアイアンウルフの残党たちは、それをみてあわてて逃げ出そうとしたが、時はすでに遅く、衝撃波に巻き込まれた彼らは意識を失い、土煙にのまれてしまった。

「《天使》の国の《魔術》って言葉を知っているか？　俺はそこで《体操作》っていう魔術を教えてもらった。体にどんな攻撃でも耐えられるような硬さや耐久度を持たせたり、体の重量を１０ｔまで重くしたり１ｍｇまで軽くしたりすることができたりするわけだ。ちなみにいまのは《硬化》と《重量増加》の合わせ技だ」

土煙がやみ、その中から出てきたヴァイルはひらひらと手を振りながらそう話す。彼の後ろにはまるで隕石の直撃でも受けたのではないかと思えるほどの巨大なクレーターが出来上がっており、衝撃波に巻き込まれ気絶していた哀れな何匹かのアイアンウルフたちは、槍による攻撃で止めを刺されたのか絶命してその中で転がっている。

「更に、俺はその特性を自分の服や武装に移す魔術……《感染》魔術も教えられている。この槍の状態はさっきのおれの拳と同じだぞ？」

重量１０ｔ。硬度ダイヤモンドの３倍。何人も傷つけられぬ無双の槍。

勝てない……。この敵と戦えば自分たちは確実に死ぬ！！

本能的に実力の差について気付いているアイアンウルフ達は、明らかに怯えの色を浮かべて後ずさる。だが、彼らも引くことはできない。おめおめ尻尾を巻いて帰ったなどと飼い主に知れれば、どちらにせよ悲惨な死を遂げるのだから。

「というわけだ。尻尾巻いて祖国に帰るか、俺に殺されるか……好きな方を選べ。駄犬ども」

答えはすでに出ていた。

天高く飛びあがりヴァイルを食い殺そうと咆哮を上げるアイアンウルフ達を見て、ヴァイルは眉をしかめながら槍を構える。

「まったく。命を粗末にしてんじゃねぇよ」

ただでさえ、魔族関連のものを殺すのは気が咎めてんだから……。ヴァイルのつぶやきは闇へと溶け、

殺戮の夜が始まる。

1話（前書き）

始まり始まり～

1話

のどかな朝。空にはトンビが気持ちよさそうに飛びヒュルヒュルと鳴き声をあげている。

そんな朝には不釣り合いな、漆黒に塗りつぶされ、尋常ではない威圧感を発する城壁。

そこに設置された小さな小屋のようなスカイズ王国南門の門番詰所には、南門警備隊長であるヴァイル・クスクが座っていた。今日も今日とて首都に出入りする商人たちや旅人達から、通行税徴税という名のカツアゲをするためである。

「……ｚｚｚ」

目を閉じながら！　鼻提灯を膨らませながら！！

「あの～。いいのでしょうか？　このまま素通りしてしまって……」

「いいんだよ。もし起きていたとしてもヴァイルの旦那は金なんかとらねぇ。あの人この国の中枢が大嫌いだから『俺らから金巻き上げるくらいだったら王宮で打ち首になったほうがまし！！』ってこの前豪語していたぜ」

そんな会話を交わしながら、見張りをしているヴァイルの目の前をベテランの商人と新人の商人と思われる人物が素通りしていく。

しかし、ヴァイルは決して寝ているわけではない！　彼らは実は彼の生き別れの兄弟で顔も素性もよく知っているから……怪しい人

物ではないと知っているから、素通りさせているのだ！　『王宮から提示された法外な通行料をとるのがめんどいから』とか、『昨日夜中近くまで魔物の駆除をしていたため眠たいから』とか、『法外な金とって俺が恨まれるくらいなら国が破産した方がよくね？』とか、そんなことは一切考えていない！！

「「「「「お世話になりまーす！」」」」」

先ほど行商人の団体が二百人ほど素通りしたが、彼らを素通りさせたのも、実は彼ら全員ヴァイルの親戚で素性を知っているからであって、決して『仕事が面倒だから』とかそういった理由はない。ないったらない！！

「働かんかこのボケナスがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

そんな風に内心で苦しい言い訳を繰り返し、仕事をさぼりまくっているヴァイルに裁きの鉄槌は落ちないのか？　いや、落ちないわけがない。

天高くそびえたつ城壁の中からそんな怒声が聞こえてきたかと思うと、城壁にあけられた窓から赤い雷が飛来！　ヴァイルが突っ伏していた机に直撃！！　机を炎上させた！！！

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？　さ、サーシャ隊長！？　ち、違うんです！！　これには深いわけがありまして……。先ほど素通りしたのは実は全部俺の親戚……」

さすがに真横で小火が起きれば面倒くさがり屋のヴァイルも目を覚ます。

いきなり発生した高温の熱量に、悲鳴を上げて飛び起きるヴァイル。あわてて怒声の主に言い訳を始めるが、当然そんないい加減な言い訳が通じるわけもなく、

「そんなわけあるかぁあああああああああああああ！！　というか、門番なら親戚でも素通りさせるんじゃないのぉおおおおお！！」

結局その怒声の主は城壁の窓から飛び降りながら、ヴァイルに向かって雷を降らせた。

「ぎゃぁあああああああああ！？　シャレになってない！！　シャレになってないです隊長ぅうううううう！！」

そんな風に悲鳴を上げながら逃げるヴァイルに、かなりの高さから落ちたにもかかわらず平然と地面に着地を決めたどころか、逃げるヴァイルを元気よく追いかけはじめる怒声の主。

城壁警備隊の地味な制服をビシっと着こなし、紫の長髪を簪でまとめ、豊かな胸を揺らしながらヴァイルを追いかける彼女は、城壁総合警備隊長サーシャ・トルニコフ。ヴァイルの上司で城壁警備隊のトップである彼女のいつもの折檻風景を見て、城壁を通るためにやってきていた商人たちは『またか』と言うふうに苦笑を浮かべるのだった。

……†……†……†……†……

「それで……。俺に仕事をさせることだけに全神経を費やしている隊長が、わざわざ俺を持ち場から引き離してあんたの執務室に連れて行く理由はなんですか？」

場所はヴァイルが言ったように執務室。ヴァイルの折檻に一通りのことをやり満足したと思われるサーシャは、どういうわけか城門の見張りをヴァイルの部下に命じ、ヴァイル自身を自分の執務室に呼びつけたのだ。

質実剛健を絵にかいたように体現した何もない執務室。そんなところに不釣り合いな、『さっさと仕事さぼりたいんですけどー』といわんばかりにだらけきった雰囲気を垂れ流しながら、（制服もかなり着崩しているためその雰囲気に拍車がかかっている）ヴァイルは皮肉を飛ばす。

そんなヴァイルに頭痛でもおぼえたのか、サーシャは頭を押さえながら、若干の怒りをはらんだ嫌味をヴァイルにぶつけた。

「自覚しているならもっと自主的に仕事をしてほしいんだが？」

「ほら、俺って『仕事をさぼって居眠りしていたら、いつの間にか主人公から脱獄されてしまった牢屋の看守』的な脇役ですから」

「自分を貶めてまで働きたくはないのか、まったく……。そんなお前に朗報だ。昨日の今日で悪いがまた強制特別任務だ。といっても、今回は王宮公認だがな」

少々面倒な仕事を押し付けられた。と、サーシャは明らかに気が

進まなさそうな顔をしながら一枚の書類をヴァイルに渡す。

「これは？」

「王宮からの命令書だ。なんでもわが城壁警備隊から七百人ほど兵をかせとのことだ」

「七百も？　確かにうちは人数多いですから、そのくらいの貸出しへでもないですけど、そんなに兵隊集めて一体何するつもりなんですか？　それに、俺たちのような下賤な血が入った人間を王宮にあげるなんて今までにない事態ですし……」

あまりいい予感はしないな。

と、ヴァイルは思う。

あのプライドが高い王族・貴族が、普段は『下賤な輩』とさげすんでいるヴァイルたちに協力を求めてきているのだ。不気味なこと極まりない……。

と、疑心暗鬼に駆られてしまっているヴァイルに小さく嘆息をしつつ、サーシャは今回の命令の原因をそっと告げてやった。

「なんでも……勇者を召喚するんだと」

ヴァイルはサーシャの言葉を聞き、数秒の思考の後、

「え……いまさら？」

なんだか気の抜けたような表情で、唖然とするのであった。

…†…†……†…†…

『勇者召喚』。それはスカイズ王国が『魔法大国』を対外的に名乗っていられる唯一のファクターである。

この魔法は大陸東部を占領統括している『魔王』が復活したときに発動されるもので、異世界から才能ある人間を無理やり呼び寄せ、魔王と戦ってもらおうという……何ともまぁ他力本願かつ、どうしようもなくはた迷惑な魔法なのだ。

まぁ、その勇者必ずと言っていいほどが一定の功績をあげてしまうので、この魔法は脈々と受け継がれてきてしまっているわけだが……。

「まさか本当にやるとは……。歴代勇者がろくなことにならなかったのは知っているだろうに……」

初代勇者は「明日センターテストだったのに！！」と呼び出された瞬間ブチキレて、当時の王に掴みかかったらしい。その後しばらくはおとなしくしていたが、勇者としての力を目覚めさせるための儀式を受けた後即座に国を出奔。当時この国に敵対していた他国へと逃げ、その国に彼が持ちうる知識のすべてを与え、その国に巨万の富を築かせたとか……。ちなみにその国は今ではスカイズ王国を

含む三大国に数えられており『科学の国』として発展している。ちなみにその勇者がどうなったかを知る者はいない。

先代……二代目勇者はどうしようもない泣き虫だったようで、召喚された瞬間に「おうちに帰して！！」と号泣し始め、その当時の王に『使えない』という烙印を押され違う国に捨てられたらしい。しかし、その勇者……成長率が半端なく、あっという間に当時最強の魔法剣士をブチのめし、その称号を奪い取ったあと、二か月で魔王領を占領。当時の魔王を瞬殺したらしい。その後は旅の仲間の一人だった、どこぞの姫君と結婚して新しい国を作ったとか……。ちなみにこの国も三大国に数えられており『勇王の国』として名をはせている。現在最も軍事力が高い国である。

つまり何が言いたいのかというと……。勇者呼び出しても、うちの役に立つ可能性は限りなく低くないか？　ということである。

まぁ、ヴァイルはとある理由からスカイズ王国の王族とそれに連なる貴族が凄まじく嫌いだ。べつに勇者を呼び出した後その勇者が貴族に害をなそうが、国に不利益をもたらそうが、知ったことではないのだが、

「いくらなんでもこれは見逃せないだろう？」

王宮に呼びだされ、そこの花壇の見回りと手入れを任されていたヴァイルは、その花壇の中に隠されていた魔法具を拾い上げ少しだけため息をついた。

球体状の小石に目玉のような模様が刻印されている魔道具。確かこれは……魔法、科学、軍事力、そのすべてが謎に包まれた巨大帝国《天使の国》のもの。

知り合いに《天使》がいるのでこういった魔道具についてもいろいろと教えてもらっているヴァイルは、これがなんなのかを知っていた。

「『セントピエトロの瞳』だったか？　魔力の収束阻害が主な効果だったはず……」

背中から抜き放った槍でその魔道具を真っ二つにたたき割りながら、ヴァイルは首をかしげた。

「こんな妨害しかできない、悪趣味な形をした魔道具をうちのバカ貴族たちが花壇に置くとは思えないし。いったい誰が置いたんだ？　最近隊長が怪しんでいた間諜でもマジで入っていたりして」

だとしたら、その裏切り者は一体どうしてこんなものをここに置いた？　うちの王宮の奴らは宮廷魔導師ぐらいしか魔法を使える人間はいない。わざわざこんなものを置いて魔力の集中を阻害する必要などどこにもない。おまけに国も絞りきれない。天使の国では十中八九ないだろう。あそこはわざわざうちに間諜なんて飛ばさなくても《透視・遠視》の魔術でも使えば情報なんて集め放題だろうし。だとすると『科学の国』か『勇王の国』のどちらか。もしくは魔王軍……。

と、ヴァイルはそこまで考えた後で何かにひどく絶望した様子で頭を抱えた。

「って、何シリアスにきめて考え込んでんだよ、俺。俺は『わけのわからない物品を見つけた瞬間、味方に化けていた敵の間諜に殺されてしまう』感じのわき役だろ？　なに真剣にこの国の行く末につ

いて考えちゃってんの……」

隊長のせいで働き癖がついちゃったじゃないか。鬱だ……死のう。そんな風に激しく落ち込むヴァイル。だが、そんな彼の後ろから静かに危機は迫っていた。

…†…†……†…†…

それはひどく美しい男だった。短くきり揃えられたサラサラの青髪。顔はまるで神が作り上げた芸術作品のように整っている。そんなイケメン優男。だが、その右腰には彼には不釣り合いな大剣がつるされており、彼がそれなりの荒事をこなせることを示していた。

スパイのように完璧に無音で、気配を殺して近づいてくるその人物にヴァイルは気づくことができていない。

「ふっ……」

その人物は最後に凶悪な笑みを浮かべると同時に、足のバネを使い、一気にヴァイルへと飛びかかった！！

「ふん！！」

「げぶっ！？」

しかし、今まで完全に絶望の海に沈んでいたと思われたヴァイル

は、あっさりと男の突撃に反応し、それを躱してしまう。どうやら今までの態度は全部演技だったようだ。

変な悲鳴を上げて花壇に突っ込む男に、ヴァイルは思わず三白眼になった。

「何してんすか、ゲイルの大将？」

「幼馴染なんだから敬語はやめろ、って言っただろう？」

「大将は貴族出身の騎士で、俺は平民の下っ端です。敬語を使うのは当然でげす」

「それで敬語を使えているつもりでいるお前にびっくりだよ……」

そんなことを言いながら立ち上がり、鎧についた泥を払落し、青い髪を持ったイケメン騎士――ゲイル・ガンフォール・ウィンラートは、ヴァイルに屈託のない笑みを向けた。

それによって跳ね上がる、空気中のイケメン度数に閉口しながらヴァイルはチッと舌打ちを漏らす。

（毎度毎度思うが、この幼馴染はどうしてこんなに神様に愛されているのだろうか？　まぁ、俺は脇役だから今更そんなこと気にしないけど）

と、ちょっとだけ負け犬の遠吠え的な思考をしつつも、ヴァイルは特にそのことを表情に見せることもなく、呆れたといわんばかりの声音で、ゲイルに質問をぶつけた。

「それで、どうしてこんなところにいるんすか？　今は騎士団のバカどもは忙しいんでしょうが」

このゲイル、こう見えて騎士団副団長という結構な地位についているため、勇者召喚という一大行事が行われている今、こんなところで油を売っている暇はないと思うのだが……。

「城壁警備隊の連中が来ているって聞いたから、お前はいるかな～？　とは思って見にきたんだけど、ほんとにいたんだな？　王宮嫌いのお前にしては珍しい」

近くの花壇に腰を下ろしながらそんなことを言ってくるゲイル。ヴァイルもそれに合わせて近くの花壇に腰を下ろした。

「サーシャ隊長の強制命令ですよ。じゃなきゃこんなところにはこねーです。というかそんなこと聞いていません。今は勇者召喚の式典の時間でしょうに？　副団長が抜け出して大丈夫でげすか？」

「いや……。オレとしては勇者召喚にはあんまり乗り気じゃないんだよ。うちの世界の事情にほかの世界の人間を巻き込むのは気が引けるし……。おまけになんだか魔力の集まりが悪いらしくて、儀式がかなり長引いているんだ。かれこれ二時間も呪文を聞いていたから飽きてしまって……。ちょっと気晴らしに外にでてきたというわけ」

ゲイルの苦笑交じりの説明に、ヴァイルは納得したと頷きながら、先ほどつぶした魔法具を思い出していた。

（魔力の集まりが悪い。普段なら宮廷魔導師どもが無能なんだろうって笑ってやるところなんだが、今回ばかりはそうもいっていられ

ないな。明らかに原因はあの魔道具だし。目的はおそらく勇者召喚……か？　だとしたらあの魔法具を置いたのは魔王軍でほぼ確定だな）

最後にはあまり考えたくはない結論に達してしまい『うわ～まじで～。間諜がいる可能性が濃厚になってきたじゃないか……。マジでウザいな～。そして、俺はまた仕事のことを考えているし！！』と、内心でげんなりとしつつも、ヴァイルはおおきくため息を一つ、

「ハァ……。ただでさえめんどくさいのに、勇者召喚なんてしやがて。勇者とかほんとこなければいいのに。あ、じゃあの魔道具こわすんじゃなかった。貴族に恥かかせられるわ、勇者は来ないわで一石二鳥だったな～」

「ん？　何か言ったか？」

ヴァイルのつぶやきが聞こえたのか、やれ新しく入った部下が厳しいだの、妹に彼氏ができてしまったどうしよう？　などと世間話をしていたゲイルは少し話をやめてヴァイルにそう尋ねてきた。

「……」

ヴァイルはゲイルにこのことを話すかどうか迷い、考え込む。

王宮嫌いの彼としては王家が弱体化するのは望むところだ。だが、ヴァイル個人としてはそんなくそ危ない王宮の中に友人であるゲイルを置いておくのも気が引けた。

かといって、『王宮は危ないから逃げた方がいいよ～』といったところで逃げる男でもないし……。

「はぁ〜。お前って本当にウザいな〜」

「敬語やめたと思ったらしょっぱなから悪口かよ！？」

ため息交じりに友人の面倒臭さを再確認したヴァイルの言葉に、ゲイルはアイアンクローを発動した。

…†…†……†…†…

それからしばらく経ち、ヴァイルが花壇の世話に戻り、ゲイルが自分が突っ込んでしまったせいで荒れてしまった箇所を直し始めたときだった。

「なんだ？」

「天気が変わった……というには急すぎるな？」

空模様が急に怪しくなり始めて、ゴロゴロと不穏な音をたてはじめたのだ。いったいなんだ、と首をかしげる二人。だが、彼らの疑問はある人物の登場によってあっさりと解決する。

「何をしておられるのですかウィンラート卿！！」

あからさまに『怒っています！！』言わんばかりの声音でゲイルと同じような甲冑を着こんだ美女が、ものすごい勢いで怒鳴り込んできてゲイルの耳を引っ掴んだ！！

「イタイイタイ痛い！！　なにするんだ、シルベット！！」

「それはこっちのセリフですわ！！　せっかく儀式がうまくいき始めというのに、いつのまにかあなたが消えてしまって騎士団中大騒ぎですのよ！！　騎士団長や国王陛下の顔色がもうこの世界の人間ではありえない感じになっていましたわ！！」

「え、うそ！？」

ああ、そういえばさっき魔道具こわしたから魔力はちゃんと集まるようになったんだったな。と、いまさらながらそれに気付いたヴァイルだったが、

『まぁ、もとより関係のない話だしどうでもいいか』と自己完結。さっさとゲイルを見捨てることにする。

「いいからさっさと帰ってきてください！！　もうすぐ勇者様がこちらにいらっしゃるのですから！！」

ゲイルの耳を引っ掴んだままそういう彼女は、黙々と花壇をいじっていたヴァイルに目を向け『ふんっ』と鼻を鳴らし、

「警備ご苦労様です！！」

傲然とそう言い放った。

（ん？　あれ？　これ俺に向かって言われてね？）

てっきり無視されるものと思い、特に何の反応もするつもりはなかったヴァイル。しかし、女騎士はきっちりこちらに挨拶をしてきており、

「こ、こちらこそ！！　お仕事ご苦労様です！！」

ヴァイルはあわてて立ち上がり敬礼を返した。そんなヴァイルを満足そうに見た後、女騎士は、ゲイルの耳をつかんだまま彼をズリズリと引きずり王宮内へと姿を消した。

（珍しい奴もいたもんだ。平民にねぎらいの言葉をかけるなんて……。まぁ、態度はかなり悪かったが）

おそらく、さきほどゲイルが話していた新しい部下であろう女騎士に、少しだけ感心しながらヴァイルは黙ってその女騎士を見送った。

途中ゲイルが、

（助けろよ！？）

とばかりにアイコンタクトを飛ばしてきたが、

（うっさい。おとなしく仕事に戻れ）

と、返してやった。

その後ヴァイルはすこしだけ、ゲイルが消えた王宮を見つめ、

「最近……人を連れて行くときは耳を引っ張るのが流行っているのか？」

勇者なんてものには微塵も興味を見せることはなく、『そっちの方がどうでもいいだろ！？』といわれそうなことを気にしながら花壇の警備へと戻るのだった。

2話

「今日も王宮へレッツゴーだ」

「……理由を聞かせてください」

ものすっごく渋い顔をしながらそう言ってくるサーシャに、ものすっごく嫌そうな顔のヴァイルはそう問い返す。

勇者召喚の儀式が終わった翌日。再び朝早くにたたき起こされたヴァイルは、眠さで閉じてしまいそうな目蓋を必死にごしごしこすりながらサーシャの執務室に立っていた。

そこで知らされた信じられない事実。

うちの王族が二日も連続して俺たち平民に城の警備を任せるなんて……明日は槍の嵐か、雷の雨か……。どちらにしろ、ろくなことにならないに違いない。

そんなくだらないことをヴァイルが考えているとは知らないまま、サーシャは大きなため息をつきながら、疲れ切った瞳でヴァイルを見つめた。

「まぁ、理由もクソもまた貴族のわがままなんだけどね……」

「まぁ、一応理由だけでも……。あと隊長は一応女性なんですからクソとか平然と使わない！！」

「はぁ、聞くだけ損した気分になるよ？　あと、一応ってなんだ？

殴っていいか？」

「どこまでひどい理由なんですか……。あと、殴られるのはごめんこうむります」

あんまりなサーシャの言い草に愕然としながらヴァイルは一応話の続きを促してみる。確かにろくな理由ではないだろうが知らないよりかはましだろうと思って……。だが、

「昨日勇者様が来たじゃないか？」

「ええ、知り合いが耳引っ張られながら連れていかれましたから……」

「？　まぁ気になりはするがあんたの話は、今はどうでもいいよ。でね、うちの王族たちは……『こ、今度こそは勇者様にうちの国の勇者になってもらわなくては！！』って思っているわけ。そこでいま王宮では全力で勇者様を出迎える準備をしているから、王宮警備に騎士団を裂いている余裕はない！！　だとさ……」

「……」

ヴァイルは……聞かなきゃよかったと思った。

いや、まぁ、心情は分からなくもないが、仮にも自分たちの拠点守るよりも客人のもてなしを優先するってどういうこと！？

自国の貴族のバカさ加減にほとほと呆れながら、ヴァイルは少しだけ大きくため息をつき、

「ウザいですね」

「王宮では絶対に言うなよ？」

なんかもう、寝不足すぎて不機嫌の針が振り切ってしまい、逆に笑顔になりながら毒を吐くヴァイルを見て、サーシャは若干顔を引きつらせるのだった。

…†…†……†…†…

「であるからして……諸君ら平民がこの高貴な宮殿を守れるのはとても光栄なことであり……」

キラキラと水が朝日に反射し、輝く噴水。風に揺らされサラサラと、耳の心地よい音を奏でる整えられた芝生。それによって美しく彩られた王宮内の正門広場。そこに響き渡るのは、この広場にはひどく不釣り合いなデップリト太った騎士団長の口やかましい演説である。

現在は朝の１０時。サーシャの命令によって早朝６時に王宮にやってきたヴァイルたち城壁警備隊を待っていたのは、現騎士団長からのありがた～い御講話（笑）。

『やれ高貴な王宮を守れることを誇りに思え！』だの、『本来なら

土を踏むことすら許されない場所に呼んでいただいたことを国王陛下に感謝しろ！！』だの、『王宮を守るためには自分の命すら投げ出せ！！』だの、そんな感じの説教が約四時間。延々と続いて『今ココ！！』になるわけだが、

「そう思うんだったら仕事させろよ……」

自分が率いる南門警備部隊の隊長として先頭に立ちながら、おっさんの声を聴いていたヴァイル。そんな彼は、殺気でどす黒く彩られた呪いの言葉を、騎士団長に聞こえないようにつぶやいた。もう、怒りの針が振り切れて真黒なオーラ垂れ流しまくりだ。

「旦那。あんまりはっきり言うと相手に聞こえます。あとあんた仕事嫌いでしたよね！？」

そんな彼に若干呆れた声音で左隣からツッコミを入れるのは、短く切りそろえられた桃色の髪を持つ『どう見ても１０代美少女！だけどほんとは三十路のおじさん！？』などという意味不明のビジュアルを持つ城壁警備隊の七不思議。『萌える』東門警備隊長ロベルト・マッケンディーである。

「まったく……仮にも相手は騎士団長なんですからもう少し自重してくださいよ……」

「いやいや……。だって仕方ないだろう？　炎天下の中、鎧きこんでわざわざ徒歩でやってきたっていうのに、待っているのは暑苦しいデブのおっさんの演説だぞ？　誰とく～？　だろ。むしろ『おっさん死ねっ！！』って思っている人間の方が大多数だろ？」

「僕たち隊長陣は鎧来てませんけどね」

制服、態度ともにダラっとした雰囲気を垂れ流しながらグチグチ文句を言うヴァイルに、ロベルトはアハハハとうつろな笑みを浮かべて肯定した。

「まぁ、旦那の怒りはわかりますけど……」

しかし、相手は仮にも騎士団団長だ。このままヴァイルを放っておくわけにもいかず、ロベルトが一応ヴァイルをいさめようとした。

そのとき、

「大将！！　そんなに嫌なんだったらいい方法がりますぜ！！」

ヴァイルの右隣に立っていた、ヴァイルのさぼり仲間である北門警備隊長、アルフォンス・クラーシタニアが話しかけてきた。

このアルフォンスという男。実は、

「いい方法？　なんだよ、それ」

「あの隊長のことをサーシャ隊長だと思い込むんすよ！！　そうしてみるとあら不思議！！　どんだけ暑苦しいおっさんの演説でも、あっという間のおれたちを喜ばせる、サーシャ隊長の罵りに……」

ヴァイルたちの世界ではまだ珍しい『ドM』という、たぐいまれなる異常性癖を持つ変態だった。

「なるかバカ。というか罵られて喜ぶ奴なんてお前以外いな……」

ヴァイルはいつものようにため息交じりに、アルフォンスの戯言を封殺しようとしたが、

「はぁはぁ……サーシャたんもえ」

「ああ、もっとののしって！！」

という不穏な言葉が風に乗って部隊の方向から聞こえてきたので、若干顔をひきつらせた後、頭を抱えた。

「旦那……」

「アルフォンス菌に感染してしまったか……」

「人を伝染病みたいに言うのやめてくんない？　さぁ、大将も俺たちと同じステージに立つときが来たんですぜ！！」

「誰が立つか、ド変態！！」

「ふはははは！！　もはや私にとってそれは褒め言葉ですな！！」

「なん……だとっ！？　貴様……いつの間にそんな神がかった返しを言えるようになった！？」

「旦那わざわざ乗らなくてもいいですって……」

「そこぉ！！　静かにしろ！！」

何やら騒がしくなってきたヴァイルたち隊長の雑談に、とうとう我慢の限界がやってきたのか、騎士団長がようやくまともな理由で

怒鳴り声を上げたのだった。

…†…†……†…†…

「「さぁて……仕事、仕事」」

「そういうんだったら今すぐその重い腰を上げてください！　アルフォンスさん、旦那！！」

結局あの騎士団長の演説が終わったのはあれから三時間後だった。現在はお昼の一時。ただでさえ少ないヴァイルやアルフォンスのやる気を御臨終させるには十分な時間帯だ。

というわけで、現在ヴァイルとアルフォンスは、警備はほかの兵隊たちに任せて自分たちだけは演説があった広場から動こうとせずに、噴水のフチに寝転がりながら、ダラダラのんびりとしていたのだ。もちろんロベルトはそんな二人を何とか働かせようと孤軍奮闘しているのだが、正直押され気味である。

「いやいや……。ちゃんと働くよ。目が覚めたら」

「あと４時間したら考えねーこともねーですけど……」

「見張りの時間が終わってしまいますよ！？　どんだけ休む気です

か！？」

こんな風に……。

「うっせーな。あんだけ長い時間警備兵を一か所に集めておいても大丈夫なくらい平和なんだったら、俺ら二人がサボったところで大した影響はねぇよ」

「部下へのケジメの問題です！！」

だらけきった声音で、何やら屁理屈をこねてくるヴァイルたちを、どう見ても美少女のロベルトがしかりつける光景……。まるで、ニートになった兄たちを叱りつける妹である。

実際は三十路になったおっさんが『人生なめんな！！』とダメ後輩たちを怒鳴りつけているだけなのだが……。

「あなたたち……なにしているの？」

本来ならばサーシャあたりが怒鳴りつけにやってくるのだろうが、あいにくとここは王宮である。貴族や王族はわざわざ平民を気にかけるようなことはしない。唯一怒ってきそうなのは騎士団長だが、彼は現在勇者様にかかりっきりのようなので、誰かが声をかけてくることなんてまずないだろうと高をくくっていた、ヴァイルとアルフォンス。

だから、突然見慣れない少女が話しかけてきたときは、正直心底驚いてしまった。

後ろで結ばれたポニーテールを揺らしながら現れた少女は、この

世界では珍しい黒髪に茶色い瞳。年齢はヴァイルよりも若干年下といった感じ。大体１６、７歳ぐらいだろうか？　科学の国で開発された新しいスタイルの服装で、サーシャがわざわざ取り寄せて城壁警備隊の女性士官の制服にしてしまった《ブレザー》と呼ばれる服装に酷似している。しかし、質は段違いに良さそうだ。この世界ではまず作れなさそうな上等な布で作られたそれは、どことなく賢そうな雰囲気が漂っているように見える。

「なにって、サボりっすけど」

「堂々と何を言っているんですか……」

「う～ん。御嬢さん。僕の守備範囲にはちょっと足りないな～。あと二年歳を取って、一言目が『平伏しなさい！　この薄汚い豚ども！！』になったらもう一度声をかけてね～」

「こんな子供に何言わせる気ですか！？」

「あははは！！　面白いわねあなたたち！！」

まぁ、自分たちに話しかけてきた時点でこの国の貴族ではないだろうと予想した二人は、アクセル全開でいつものようなおふざけ満載な言葉を放つ。どうやら少女はそれが気に入ったらしく、大いに笑いながら二人のことを許した。

「ちょうど未来――勇者のご機嫌をとるためだけにやってくるバカ貴族どもの相手をして疲れていたところよ。お話し相手になってくれないかしら？」

ん？　勇者？

ヴァイルがその単語の意味に気付き、だらけきった顔のまま凍りつく中、少女は、

「私の名前は富阪アリサ」

アッサリと、

「勇者召喚に巻き込まれた勇者の友人で」

にっこりと、

「王宮に軟禁されることになった、かわいそうなかごの鳥なの～」

すさまじい勢いで、彼らに厄介ごとを持ちこんできた。

とんでもない発言をかまし、一発でヴァイルたちは王宮の闇へと引きずり込んだ少女は、ニヤリと人の悪そうな笑みを浮かべるのだった。

3話

「つまりあんたは今回の勇者をうちの国にとどめておくための楔なんだな？」

「まあ、そういうことになるわね。話に聞いたところによると歴代勇者はさっさとこの国はなれちゃったみたいだし～。私を人質に取っておけば勇者がこの国から離れることはない、って思ってのことでしょうね。まぁ、私が召喚に巻き込まれたのは事故みたいなものだったようだし、おそらくはアドリブで作った計画でしょうけど」

「そのこと、勇者は知っているのか？」

「あいにくと、あの子は人を疑うことはしない主義なの。貴族たちが直接口からそのことを言うまで、あの子は《あの人たちはいい人》って信じ続けるでしょうね」

まぁ、私もあの子に守ってもらうほどやわな女じゃないけどね～。アリサは自信にあふれた笑みを浮かべながら、肩をすくめた。

場所は先ほどと同じ広場。そこに設置された噴水に腰掛けながら、勇者の親友と名乗ったアリサは自分が召喚された大まかな事情をヴァイルたちに無理やり聞かせた。

《学校》という教育機関から自宅へ帰る途中に、突然空中に出現した渦に勇者ごと巻き込まれたこと。その後、目を覚ますと何やら偉そうなジジイ（うちの国王）と、威圧感たっぷりな甲冑人間（うちの騎士団）に囲まれてしまい、逃げるに逃げられなかったこと。最終的に国王から自分たちが呼ばれた理由を聞かされ『はぁ？　こん

な可愛くて幼い女の子たちに何頼んじゃってんの、この耄碌爺は？
そのくらい自分たちでどうにかしなさいよ』と言ってしまい殺されかけたこと（自業自得）……などなど。

なんで俺にこんな話ふるの？　俺は『商店街にでてきた勇者に褒められて若干機嫌がよくなったためリンゴを一つサービスする八百屋さん』みたいな感じの一般小市民的な脇役なのに。と、ヴァイルは頭を抱えた。

こんな物騒なこと聞いてしまった以上、うちの貴族たちは黙ってはいない。まぁ、近くに貴族はいないようなので、話したことを目の前の女が黙っていてくれれば万事解決なのだが、

「ああ、誰かこのかわいそうなかごの鳥を助けてくれないかしら～」

「「「……」」」

わざとらしいアリサの言葉に思わず無言になる三人。

「結構近くにいると思うんだけど～。具体的には１０代ぐらいの幼女を連れた二人組のおっさんあたりが助けてくれると思うんだけど～」

僕男なんですけど……。というロベルトのつぶやきを完璧に無視して話を続けるアリサに、ため息をつくヴァイルとアルフォンス。

「まぁ、そんなひと近くにいないから仕方ないんだけど。ああ、でもその人たちが助けてくれないとうっかり『愚痴をこんな人たちにこぼしちゃった～』って、似顔絵つきで貴族に言っちゃうかもしれないし～。ああ、本当に困ったわ～」

「「「……」」」

悪質極まりない！！

ギリっ！　と、奥歯をかみしめながらヴァイルは思わず天を仰いだ。ロベルトとアルフォンスの反応も大体そんな感じの反応だ。

こいつ本当に勇者の友人なのかよ！？　ああ、こんなことならきちんと仕事をしとくように見せかけて、違う場所でさぼっておくんだった。

あくまで働く気はないニート野郎のヴァイル。自業自得&反省という言葉は彼の辞書には載っていないようだ。

「はぁ。まったく厄介な女につかまっちまったな～。大将」

「まったくです。日ごろの行いが悪いからですよ、旦那。まぁ、救出作戦がんばってください」

「待て、お前ら……。なにナチュラルにお前たちだけ緊急回避しようとしているんだ！？　死なばもろとも、地獄の底まで付き合えや～！！」

ヴァイルはウガァ！！　と、叫びながら、なにやら『自分には関係ありませんよ～』といった顔で、するする離れていく二人の襟首をつかみ捕獲する。仲がいい三人組だ。

「まぁ、べつに逃げてもいいけど～私あなたたちの顔を完全に記憶したから、ぶっちゃけ逃げても無駄よ。こう見えても絵は得意なん

だから！！」

少女はそう言って地面に何やら絵を描き始める。どうやらヴァイルたちの似顔絵を描いているようだ。

その光景にちょっとだけ絶望しながら、どれどれ、と三人はその絵を覗きこみ……。

「散開！！」
「「応！！」」
「え、ちょ、なんでにげんのよ！？」

どこかのモンスターのようなぶっさいくな顔をした何かが描き出されているのを見て、即座に逃走へと移るのだった。

……†……†……†……†……

ヴァイルたちが逃げ出してから三十分ほどたった王宮内。真っ白な大理石の巨大な柱が囲む長い廊下を、三人のバカとアリサが走り抜けていた。どうやらいまだに追いかけっこは続いているようだ。

（はぁはぁはぁ……はやい。さすがは文明の利器に頼らない人間！！　デフォで持っている身体能力が違いすぎるわ！！）

しかし、彼女は元の世界では完全な帰宅部。特に運動をしていたわけでもない彼女の体力はすぐに底を突いてしまい足の動く速度は減速してしまう。当然、グングン三人組との距離は開き、今はもう世界陸上の選手でも追いつけないのでは？　というほど距離が開いてしまっていた。

「こ、こんなことなら、もっとちゃんと、体育の授業、うけておくんだった……」

青息吐息でへばるアリサを見て『チャンス！！』とでも思ったのか、そのまま分裂し別々の方向へ逃げ出すバカ三人組。

この上死人に鞭打つか……。体力が底を尽きてへばっている女子に対する仕打ちではない。アリサは明らかにバカにした雰囲気を放ちながら離れていく三人の背中を睨みつけ、トンっと手を地面につけた。

「こんなところで使う気はなかったんだけど……あんたたちが私を怒らせたのが悪いんだからね！！」

自分が三人を王宮内の裏事情に巻き込もうとしたことなど棚上げして、アリサは気炎を上げながら、この世界にやってくるときに幻視した『紅茶好きの黒い本』から貰い受けた力を発動する。

そしてその数秒後……。

「ぎゃぼ！？」

奇妙な声が前方から聞こえ、何かが固い地面にたたきつけられるような音が辺りに響き渡った。

アリサはその音を聞いた瞬間、今までの苦しそうな表情をひっこめ、意気揚々とその音が聞こえたところへと歩いていく。そして、

「つっかまえた〜」

しばらく行ったところ首だけ地面から突出し、残りの体のすべてを地面の中に沈めてしまって、目を回しているヴァイルを見つけ、ニヤリと笑みを浮かべるのだった。

…†…†……†…†…

それから数分後。再び広場にて……。

ヴァイル・クスクは自分の運のなさにほとほと呆れながら、自分ぐるぐる巻きにしばりつけた犯人を睨みつけていた。

「はぁはぁ。わたし体力ないんだからこんなクサレ広い場所で追いかけっこなんてさせないで！！」

「だったら逃げる俺たちを追いかけんなよ……」

まぁ、息切れしまくって芝生にぶっ倒れているアリサを見てその視線をすぐにやめたが。

現在つかまって広場に転がされているのはヴァイルだけである。ほかの二人は部下を使い、地形を使いあっさりとこの女から逃げ切ったみたいだ。

ヴァイルだって突然地面に沈んだりしなければ、今頃うまく逃げ切ったはずだったのに……。

誰だよ、あんなところに落とし穴作ったの？　ここ王宮の庭ですよ？　なにさらしてくれてんの、死ぬの？

こんな場所に御茶目な悪戯をしかけやがった誰とも知れない人間に悪口雑言をぶつけながら、ヴァイルはとりあえず地面を転がり、自分のつかえなさをアピールしてみる。

「いや……。もうマジで逃がしてよ～。俺は『曲者が入ってきたときの真っ先に切りかかったはいいが、あっさりと返り討ちにあって二度と出てこなかった～』感じのわき役だぞ？　そりゃ確かに一般人よりかは喧嘩得意だから兵隊なんてやれているけどさ、ほんとはこんなところにも入れない門番なわけでさ～」

何とも情けく、プライドも何も感じられない光景だが、もうヴァイルがこの厄介ごとから逃れるためにはそれしかなかった。もともと吹けば飛ぶようなちんけなプライドである。いまさら守るつもりなど毛頭なかった。

「ほらほら……。見たらわかるだろ？　使えなさそうな脇役臭がするだろ？」

「え？　脇　臭？」

「なんでそこだけピックアップするんだよ！？　それだったらふつうに脇の臭い人だろうが！？」

もしかして臭うの？　といわんばかりに嫌悪感たっぷりな表情で離れていくアリサをヴァイルは怒鳴りつけた。

ほんとなんなのこいつ？　俺なんか悪いことした？　ああ、そういや仕事をさぼりまくっていたな～。

「だが俺は働かない。『働いたら負けかなって思っている……』感じのわき役だから」

「もう脇役じゃなくて完全にニートじゃない……」

ヴァイルの戯言に呆れきった顔をしながら、ようやく呼吸がまともになったアリサは、しばりつけて転がされたヴァイルの隣に座った。

「まぁ、ぶっちゃけ逃げてもいいけど、名前完全に覚えちゃったから似顔絵なしでも十分に脅迫できる材料はそろっているわよ？」

ですよね～。いまさらながらそのことに気付き、ヴァイルはちょっとした絶望の笑みを浮かべた。

アルフォンスとか、ロベルトとかだったらまだありがちな名前なので何とかごまかせるかもしれないが、ヴァイルは完全にアウトだろう。少なくともヴァイルは今まで生きてきた中で自分の名前と同じ人間にあったことがなかった。

「はぁ……。で、俺は何したらいいの？」

「おお！！　協力してくれる気になったの！？」

「無理やりだけどな！！」

泣きながら一応の抵抗をしてみるヴァイルだが、無駄なあがき以外の何物でもない。

ヴァイルの返答を聞き、ひどくうれしそうな笑みを浮かべながら、アリサは指折り今やらなければならないことを上げていく。

「う～ん。そうね～。まずは……」

こうして、この時代に初めて組まれた異世界タッグは『ＳＡＶＥ！！　囚われの勇者の友人を王宮から脱出させよ！！』作戦実行のために、悪だくみを開始するのだった。

ヒーローside（前書き）

サブタイに偽りあり。

アリサ視点です

ヒーローside

赤い絨毯が敷き詰められ、大きな暖炉がある豪華な部屋。そこに設置された天蓋つきベッドに窓から入ってきた朝日が差し込み、そこで寝ていた人物の目覚めをうながす。

「んぁ……」

寝ボケきった声でうめき声を漏らしながら、少女は隣で寝ている親友を起こさないように、ゆっくりと身を起こし、まだまだ睡眠を要求し、閉じかける眼をゴシゴシとこする。

普段はポニーテールにしてまとめている髪も、今はぼさぼさ。山姥のような見た目になった彼女の名前は富阪アリサ。この世界に事故で召喚された哀れな異世界漂流民である。

「うわ……。また乱れてる。まとめんのにどれだけ時間がかかると思っているのよ」

いつものように自分の髪に触れ、ボッサボサになってしまっていることを確認したアリサは、無言のまま鏡台に設置された櫛を手に取り……。

「あり？　なんかいつもと違う？」

ようやく普段との違いに気付いた。どうやら今まで寝ぼけてしまっていたらしい。

「ああ。そういえば変な渦に巻き込まれて……その中で黒い本にあ

って……」

思い出した。その本に力を覚醒させてもらってある《能力》を得たと思ったら、突然偉そうなおっさんやら甲冑人間がいるところに放り出されて『勇者よ……魔王を倒してくれ！！』なんて、何時代のＲＰＧだよ！！　的なテンプレートなせりふ言われたんだっけ……。

自分が「はぁ？　こんな可愛くて幼い女の子たちに何頼んじゃってんの、この耄碌爺は？　そのくらい自分たちでどうにかしなさいよ」といってしまい、国王に殺されかけたことは綺麗に無視して昨日のことを思い出したアリサは、若干のため息を共に櫛を髪に通す。

あの態度からして、この国は封建社会制度。国王がトップに立って周りの貴族と一緒に国のかじ取りをしている感じかしら？　ファンタジー世界の相場で言うなら、こういう典型的な封建制度のトップは面白いくらい利権まみれになって腐っている物なんだけど……。

ボッサボサになっていた髪を何とかまとめ、髪を後ろに流しポニーテールになるようにまとめるアリサ。彼女はこの国の在り方を大まかに類推しつつ、光が差し込む窓に目を向けた。

一応客人ということで、見晴らしがいいところに泊めてくれているらしく、そこからは王都の様子が一望できた。

王宮の周りを固める小奇麗な貴族の邸宅。その周りを覆うのはソコソコ丈夫そうな一般邸宅。そして、外周部に位置するボロボロの廃墟などが立ち並んだ貧民区。

大きさ的には貧民区と一般区がだいたいおなじくらい。比率的に

いうならば2（貴族）：4（一般）：4（貧民）である。

「やっぱり、この国のてっぺんはあまり質が高くないようね。まともな政治家だったらあんな所、放っておかないでしょうし」

おまけに王宮の装飾がやたらと豪華だし。金箔とか貼ってあるし……。ずいぶんと余裕のある『魔王に侵攻され困り果てている王国』じゃない。魔王なんて本当にいるのかしら。

アリサは昨日王に言われた言葉に疑問を持ちながら、まとめた髪を髪飾りで止める。合気道有段者である彼女の母親が今年の誕生日にくれたもので、桜の花の飾りがついた髪留めである。普段は『稽古だぁあああ！！』としか言わないガサツな母が、珍しく買ってきてくれた女の子らしいものだったので、今では彼女の一番のお気に入りである。

母さん……。今どうしてるかな……。泣いては……いないでしょうけど。

自分が誘拐されたと勘違いした母親が、怒り狂って犯人を捜しまわっている光景が容易に浮かんできて、アリサは思わず顔をひきつらせた。

これは早急に元の世界に帰る必要がありそうね……。

アリサが決意も新たに、櫛を片手にコブシを握り締めたときだった。

「ん～。まぶし～い」

やたらとかわいらしいうめき声をあげて、親友が身を起こすのを鏡越しに確認したアリサは『まったく……』とつぶやきながら、朝に弱い親友の身なりを整えるために彼女に近づく。

寝起きであるにもかかわらず、さらさらと流れる黒髪を少しだけうらやましく思いながら、アリサは寝ぼけ眼の親友――《勇者》花街未来の頭をたたき意識の覚醒を促した。

「ほら、未来。もう朝だよ……。シャキッとする」

「ん～。だっこ～」

美しい……というか、かわいらしいといった方がいい顔立ちを無理やり起こされた苦痛にゆがませながら、未来はアリサに向かって両手を突き出してくる。どうやら抱き起してほしいらしいが、そんなものは高校に上がるときに卒業したので（アリサだけ）アリサは自力で立つように促した。

「バカなこと言ってないでさっさと起きる。今日は王様と朝食とってその時にこっちの話をいろいろとしてもらうんだから、さっさと起きる！！」

手のかかる妹の世話をするように怒鳴るアリサに『ケチィ』と頬を膨らませながら未来はずるずると布団からはいだし、近くに置かれたブレザーを手に取るのだった。

…†…†……†…†…

「そうなの！？　そんなあくどいことしていたんだ～」

「ほかにもね……クペー伯爵さんの三男坊が……」

現在は王都の朝食の時間。しかし、アリサは王都の会食の席にいなかった。『食事を食べる場所です』とメイドたちに案内された場所には１０メートルはあるんじゃないかと思われるくそ長いテーブルと、その両端におかれた無数の豪華そうな料理がおいてあったからだ。

ああ、これはあれだ。昔どこかのファンタジー洋画で見たことがあるあれ。王様と客人が端に座って会話もせず食事を済ませる『あなたと直接話す気はないけど、一応ポーズとして話す姿勢はとった方がいいよね～』という気持ちを体現したくそ長机だ。と判断したアリサは即座に朝食を辞退した。会話をする気もない相手に付き合って朝食をとれるほどアリサの心はおおらかではない。

まぁ、もしかしたらあの長い机越しに話す気なのかもしれないが、それを成立させるためにはかなりの大声を張り上げなければならないので、それはごめんこうむりたい。はしたないと思われるのは嫌だし。

普段の自分は完全に脇に置いて、さすがおしとやかな私！！　と自画自賛するアリサ。誰が見ても馬鹿な子である。

閑話休題。

というわけで早々に国王からの情報収集をあきらめたアリサは、ほかの貴族たちに見つからないように使用人たちが住んでいる、寮へと赴いたのである。

（情報はこういうところに集まるのよね～。家政婦はみたってやつ？）

案の定アリサが考えていたように、メイドたちは様々な貴族の噂話やその立場を聞かせてくれた。多分に個人の意見が含まれた話であったが、今のアリサにはそれでも十分にありがたい。

だが、

「政治上の裏話とかなら聞けたんだけど、魔法や戦闘方法になると話がなくなるわね……。まぁ、そんなことメイドさんに聞いても答えが返ってこないのは分かっていたんだけど」

彼女たちから聞き出せたことと言えば『魔法がある』ということと『うちの騎士団で一番強いのはゲイルという人物』ということぐらいだ。

もともと彼女たちは貴族たちの世話こそが本業だ。小説の世界みたいにくノ一気質なメイドを探そうとしても、身分を隠しているからこそのくノ一なのだからそう簡単に見つかるわけもないし、素人のアリサ程度に見つかるなら、その人物に頼るのはだめだろう。

ということでメイドに戦闘手段を聞くのはナンセンス。かといって、この国の騎士たちに頼るのもまたナンセンス。話に聞いたところによると騎士団たちは貴族の親族で固められており年々弱体化の一途をたどっているらしい。おまけに政治上の思惑も絡み、実力は

あるが貴族に反抗的だったり、才能はあるが立場が弱い人間だったりすると騎士団を無理やりやめさせ、城壁警備隊に放り込むなどという暴挙も行っているとか……。

そんな腐りきった騎士団に頼るつもりも、助けられるつもりもアリサにはなかった。そんなところに頼ったところで得られるものなどたかが知れているし、何より彼女のプライドが許さないからだ。

かといって、このまま貴族の厄介になり続けるのもかなり危険だ。この国の貴族は黒すぎる。こんなところにいてはいつ陰謀に巻き込まれるかわかったものではない。勇者の未来を相手にそうそう暴挙に出るやつはいないだろうが、友人の自分はそうではないのだから。一刻も早くこの王宮を抜け出す準備を整えなくては……。

「とはいえ……そのために必要な知識を与えてくれる人はいないし……八方ふさがりね～。あ～あ。私が主人公だったら、そのへんに強そうな人がいて『し、信じられない！！　なんという魔力だ！！　君、私の弟子にならない？』的な運命の出会いを果たして、ばっちりパワーアップとかを果たすんだけどな～」

ため息をつきながらそうつぶやいたアリサは、『運命そのへんに転がってない？』といわんばかりに、あたりを見回す。しかし、そんな簡単に運命が、

「いやいや……。ちゃんと働くよ。目が覚めたら」

「あと４時間したら考えねーこともねーですけど……」

「見張りの時間が終わってしまいますよ！？　どんだけ休む気ですか！？」

運命が……

「うっせーな。あんだけ長い時間警備兵を一か所に集めておいても大丈夫なくらい平和なんだったら、俺ら二人がサボったところで大した影響はねぇよ」

「部下へのケジメの問題です！！」

運命が……転がっていた。

だらけきった二人の青年になりかけた少年。それを怒鳴りつける女の子という変わった三人組。彼らの制服の肩には《盾とその後ろから延びるレンガ造りの城壁》という変わった紋章が刺繍されている。メイドたちがいっていた城壁警備隊の紋章だ。

あそこは、貴族たちが自分の利権を守るために『実力のある反抗的な人間』や『才能があって目障りな人間』を押し込んだ人材の宝庫で……。

「フフフ……。ありがとう運命。今日初めてあなたに感謝してあげる」

ものすごい上から目線でそんなことをつぶやいた後、アリサはできるだけ自然な笑みに見えるように三人組へと近づいて行った。

この数分後。場内を逃げ回る不良警備員三名と勇者の友人が、とんでもない速さで追いかけっこをしているところをメイドたちが目撃し、様々な噂となって城内を駆け巡ったのだが、またそれは別の話だろう。

4話

「それで、具体的にはいったいどういった話が聞きたいんだ？」

「そうね～。今日のところはこの世界にある魔法についてかしら？」

げんなりした様子のヴァイルをひきずりながら、アリサがやってきたのは、宮殿内にある巨大図書館。この図書館には『魔法大国』と呼ばれるにふさわしい大量の魔導書が蔵書してあり、唯一この国で勇者召喚以外に誇れる場所として国民たちに称えられている。おまけに一般開放もしているため、この蔵書から様々な魔法を学ぼうと、世界各地から学生がやってきたものだ。もっとも、最近では『国民が学ぶにはあまりに高度すぎる』という王の一声によって一般開放は禁止となり、この図書室は貴族にしか使えない《開かずの図書室》となってしまっているのだが。

「ったく……なんで俺がこんなこと。しかも今日に限って見張りの騎士がいないし。いたら罵詈雑言でも浴びせかけて強制的に城の外に放り出してもらえたのに……」

「もしいたとしても私が『秘技・勇者の友人のいうことが聞けないの！！』で押し通れたわよ。ていうかなんでそんなに不機嫌なの？　こんな美少女の助けになれるんだからむしろ泣いて喜びなさい！！」

「どこの暴君だてめぇ！！　この状況で機嫌よくお前に協力してくれるやつがいるならむしろお目にかかりたいよ！！」

ヴァイルはそういって床の上でじたばたと暴れた。そう、彼はい

まだにぐるぐる巻きに縛られたままだったのだ！！

「まったく私の友達はそんな状況になりながらも『ホンマしゃーないやっちゃな……』とか言いながら縄抜けをした後、無言で私を手伝ってくれたわよ」

「それはもう人間じゃねーよ。慈愛の神様に近い何かだ……」

まったく、使えないわね……といわんばかりの表情でヴァイルの縄を切るアリサに、ヴァイルは呆れを含んだ視線を飛ばしながらツッコミを入れる。

アリサはヴァイルのツッコミに肩をすくめながら『本当のことよ』と言った後、近くにあった車輪付きの梯子に足をかけそれを上り始めた。

あまりに蔵書量が多いこの図書館では、棚の一つ一つが規格外なほど巨大だ。高さは一番低いものでも5メートルはあるだろう。

当然そんなところに蔵書された本が何もない状態でとれるわけもないので、そういったところにある本は『科学の国』から輸入した、この車輪の付いた梯子を上って取りに行くのだ。

「えっと……儀式のすべて。秘儀77選。儀式魔法の成り立ち……」

「ああ、そこらへんは調べなくていいぞ。個人では使えないからな」

「え？　そうなの」

縄に縛られていた手をさすり、血の流れを元に戻したあと、アリ

サから離れた書庫へといき迷うことなく本を選び出していたヴァイルは、アリサのつぶやきに上がった本の題名を聞き、そう忠告を飛ばした。

「儀式魔法っていうのはこの国独特の魔法なんだよ。通常なら宮廷魔導師が数十人がかりで陣を敷いて、素材集めて、魔力とおして、数か月かけて発動するものだ。ちなみに勇者召喚もこれに分類されているな」

「ふ～ん。じゃぁ普段使っている魔法はどんなものなの？」

「それを教えるために本を選んでやったんだろうが……。ほら、さっさとこっちにこい」

ヴァイルは自分の手に積まれた大量の本を顎で示しながら、アリサにそう言った。

『放出魔法大全』『収束系のメカニズム』『大威力波濤魔法』『5属性放出理論』

やたらと分厚い本たちの題名にはそんなことが書いてあり、いかにも難しそうな学術書だということがわかる。

「もしかして……それ全部覚えるの？」

「まさか。魔法の魔の字も知らなかったバカにそんなことしてなんになる。適当な時間を見つけて暇つぶしがてらに読んだら面白いだろうな～という本を集めただけだ」

ヴァイルはそういうと、このへんだったか？　とつぶやきながら

自分の制服の懐を探る。梯子を下りてきて、ヴァイルが持ってきた本に目を通し『活字嫌悪症』を発動させ、即座に本を閉じたアリサは、そんなヴァイルを見て首をかしげた。

「何さがしてんのよ」

「魔法を教えるための資料だよ。あ、あった」

ヴァイルがそう言って取り出したのは、

「……これが資料？」

「ああ。今からお前に教えるのはこれだけで十分だ」

取り出したのは一枚のぼろい紙。どういうわけか、ヤニ臭いにおいが染みついているうえにかなりの年代ものなのか、元は白かったであろうと思われる紙が茶色く変色してしまっている。

そこには雑多な文字で『ググッとくるかんじ！！』とか『ボーン！！　といったかんじで』とか『ズババッ！！　という風に』など擬音が多分に使われた抽象的な説明の後に、『まぁ、最終的に必要なのは……気合いだ！！』で締められている。

それを見たアリサは、

「なにこれ？」

「放出系魔法の奥義書！！」

「ふざけんな！！」

思わずそう叫んでしまったという……。

…†…†……†…†…

「まぁ、誰でも使える魔法である放出系は、そんな細かい理論とかそういうのは全くない」

「そうなの？」

図書館の長い机に向かいあうように座った二人。外から差し込む光は若干オレンジがかり、太陽が落ちていることを二人に教えてくれる。

「放出系のやり方はいたってシンプル。魔力を練り体の一か所に集めてそれを放つ。それだけだ」

「本当にシンプルね……」

ヴァイルのざっくばらんすぎる説明に呆れきった表情になるアリサ。

そんなアリサの反応を無視して、ヴァイルは実演とばかりに手を掲げた。そして、次の瞬間、突然ヴァイルの手にまぶしいほどの白い光を放つ粒子たちが集合し、まるで燃えているように揺らめきながらヴァイルの手を覆った。それを見て、アリサは思わず嘆息する。

彼女としては、もっと高度な……それこそ『祖は精霊〇〇。集い来たりて敵をうて！！』といったわけのわからない呪文を早口で唱えてでの高速魔法戦というやつにあこがれていたのだが、この世界での実現は不可能のようだ。

「だが、シンプルな故に強力だ。特に持っている魔力が潜在的に高い奴はな。集められた魔力によってこの魔法は威力が変わる。つまり、より膨大な魔力を集めることができればそいつは圧倒的な力を発揮できるというわけだ」

まぁ、説明はこのくらいにして、つぎは実践だな。実際にやって見せるからよく見とけ。ヴァイルはそういうと魔力がたまった腕を振るいその魔力を放った。魔力は空間に解き放たれた瞬間、砂交じりの突風に姿を変えアリサの眼を強襲する！！

「きゃぁあああああああ！？　イタイイタイ痛い痛い！！　ちょ、目に砂が入ったじゃないの！？」

アリサはよく見ておけとヴァイルに言われていたため、目をかっと見開き何が起こるのかとヴァイルの手の方をジッと見ていた。そのため、突然の攻撃にまぶたを閉じることもできずにそれをもろに食らった。当然ものすごい勢いでヴァイルに抗議するが、ヴァイルは素知らぬ顔で指先に魔力を集中させ、再び放出。今度は砂の槍となったそれはアリサの額を強打し、大きく彼女の顔をのけぞらせた。

「っううううう！？」

「この放出系が起こす現象は自分の魔力の特性によって大きく決まる。たとえば俺の魔力属性は『土』だからさっきみたいに砂が飛ぶし、『炎』の奴だったら炎が飛ぶ。また放出の形態にも『収束』と

『波濤』という二つの形態がある。さっきの砂の突風が『波濤』。つまり魔力を放出の際に集めることなくそのまま放つことを言う。攻撃範囲が広いことが利点だが、代わりに威力が収束よりも低いのが欠点。また魔力消費も激しいから使うときは細心の注意が必要。次に使った砂の槍が『収束』。放出の際にさらに小さな点に魔力を集め、それを一気に放出する。一点集中という特性上、威力は非常に高く、収束された魔力は高速で打ち出されるために、魔力が低い奴でもそれなりの攻撃手段になる。ただし、所詮点での攻撃で攻撃範囲は狭いから、よっぽど熟練したやつでないと的にあてることはできない」

わかったか？

ヴァイルは、無理やり巻き込まれたことに対する復讐ができたためか、とても機嫌がよさそうな表情で額を抑えてうずくまるアリサにそう言った。

しかし、アリサがこのまま引き下がるわけもなく、

「ええ……よくわかったわ！！」

アリサはそういうと突如立ち上がり、ヴァイルに向かって手を突き出した！！

「だから実演してあげるわよ、先生！！」

額に青筋をうかべ、思いっきり体中の魔力に号令をかけるアリサ。彼女のイメージでは自分は華麗に魔法を発動し、先ほどのお返しとばかりにヴァイルを吹き飛ばす予定だった。

だが、

「へ〜。それで収束できたつもりなのか？」

「へ？」

どういうわけか、アリサの魔力はヴァイルの時のように瞬時に集まったりせず、ジンワリとにじみ出る感じでアリサの手をゆっくりと覆っていくだけだった。

光の膜につつまれた感じの自分の腕をぽかんと見つめるアリサに苦笑を浮かべながら、ヴァイルはどうしてそうなったかを説明してやる。

「素人が初っ端から魔法を使いこなせるわけがないだろうが？　通常の人間なら、まず魔力を体の一点に集めることに二ヶ月。それが瞬時にできるようになるのに一ヶ月。収束系を使うためにさらに魔力を圧縮するのに五ヶ月はかかる。つまり、お前がおれに復讐できるのは八か月後ということだ」

「そ、そんなぁ！？」

「というかお前……よく復讐なんて考えられるな。被害者は俺なんだけど？」

無理やり王室の陰謀に巻き込まれかけた一市民としてはちょっとしたいやがらせぐらい許してほしいヴァイルである。

「何を言っているの！？　こんな可愛い女の子が痛めつけられたんだから、その前の罪はすべてちゃらにしても復讐はされるべきよ！

！」

「いっそのことお前はこの世から消えるべきなのかもな」

若干アリサの性格の悪さを垣間見たヴァイルは、微妙に顔をひきつらせながら半ば本気でそんなことをつぶやくのだった。

5話

「ということがあったのですが……」

「お前……今日はべつに王宮警備に行かないことをその女に話さなかったな！？」

「聞かれませんでしたから」

アリサにつかまり協力を強制された翌日。ヴァイルは今日一日の部隊運行の予定を告げにサーシャの事務室へとやってきていた。実は昨日で王宮警備役はゴメンとなったのだ。

それはそうだろう。いつまでも王宮の警備を平民に任せておけるほど貴族はおおらかではない。おまけに今回は勇者が来ている。仕事風景の一つでも見せておかないと悪印象を持たれかねない。

昨日、一昨日の警備異常はあくまで特別措置だったのだ。

「それにしても勇者の友人か。なかなかいい性格をしているようだ」

「まぁ、勇者の友人というのも話半分ですけどね……。勇者の友人を名乗るにはいささか性格悪かったですし。もしもあいつが本当に勇者の友人だったら今代の勇者の性格を疑いますよ～」

はっはっはっはっ！！　と高笑いするヴァイルに『お前も十分性格悪いけどな』と言いう言葉を飲み込むサーシャ。世の中には言っていいことと、言わない方が誰にとっても幸せなことがある……。

「まぁ、我々には関係のないことだ。勇者がこようが魔王がこようが、我々はただ仕事をこなすだけ……」

そんなどこかの枯れた老騎士のようなことを言いながら再び書類に目を落とすサーシャをみて、ヴァイルは少しだけため息をつき、

「隊長王族なのにもったいないですよね～。その気になれば王宮に上がれるんじゃないですか？」

とんでもない事実を暴露した。

そう。サーシャは実はこの国の王族。生まれた順で考えるのならその階級は《第三皇女》。それなりの条件さえ整えば、まず間違いなく王宮で暮らしているだろう殿上人だ。だが……

「バカをいうな。私はお前と同じただの脇役だ。私は母親が王の戯れで孕まされた挙句捨てられた身分の低い女のため対外的には存在しない王女だぞ？　いまさら王宮になんて上がれるわけがない」

「いつも思うんですけど、それでよく王宮に復讐しようとか思いませんよね……」

「面倒だからな。国をどうこうするよりも、今はこうしてお前と一緒に王都の平和を守れているだけで満足だ」

「え……」

思わぬところでされたサーシャからの告白に、ヴァイルは少しだけ固まった後、

「ふ～ん」

意味深な笑みを浮かべた。

「な、なんだよ！？」

「いやいや隊長。結構かわいいこと言ってくれるじゃないですか。一生ついていきますよ！！」

「ばか！！　恥ずかしいこと言っていないでさっさと仕事に戻れ！！」

顔を真っ赤にして怒鳴りつけてくるサーシャににやにや笑いを飛ばしながら、ヴァイルは書類を片手に部屋のドアへと逃げる。

「それじゃ行ってきま～す」

「さぼるなよ」

「いくら隊長の頼みでもそれは無理な相談ですよ」

「私の頼みじゃなくても働け！！」

ツッコミとともに飛んでくるインク壺を、ヴァイルはあわてて身をかがめ回避する。

「ちょ、あぶな！？　フタあいているじゃないですかそれ！？」

「え、うそ！？」

フタのことに関しては気づいていなかったのか、放物線を描き飛んでいくインク壺を見てあわてるサーシャ。そんなとき、執務室のドアが開き、

「サーシャ総隊長はここにいるか？」

突如としてデップリト太った騎士団長が部屋に侵入してきた！！

当然ヴァイルが躱してしまったインク壺はそのまま騎士団長を直撃し、

「「あ……」」

二人が間の抜けた声を上げると同時に、ガラス製のビンが頭に直撃する鈍い音と、その中身のインクが騎士団長の顔にぶちまけられる音が響き渡って……。

「……」

「「……」」

騎士団長は無言のまま、彼にあたった後、床に落ちたインク壺を拾い上げ、ひとこと、

「よし……そこの二人を死刑にしよう」

完全に座った眼で腰に下げた剣を手に賭ける騎士団長に、ヴァイルは背中に背負っていた折りたたまれた槍を掴み取る。一触即発。

まさにそんなとき、

「そんなことされたら困るから、却下してもらっていいかしら騎士

団長さん？」

できるだけ聞きたくなかった声が仲裁に入った。

「お、おまえ……」

「は～い！！　きちゃった！！」

額に青筋を浮かべながら、あからさまに怒っていますといわんばかりの笑顔を浮かべて、そいつは執務室の中に入ってくる。

「今日一日こいつをかりたいんだけど……了承してくれるかしら？　総隊長さん」

黒い髪のポニーテールを左右に揺らし、アリサは再びヴァイルの前に現れた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7134w/

ある脇役の英雄譚　改訂版

2011年11月15日21時11分発行